



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十一号・毎月一日発行
平成七年八月一日

北海の古平風土物語 (三十七)

鯉 場 思い出の桂の淵の川鍋会

高 橋 源 五口

高等科一、二年生の時の夏休みのことである。

私は海田綱市君と話し合っ
て部落(後の公園部落会、現・栄町)の子供たちの川遊びの世話をすることを決めた。

午前中は「夏休み帖」の勉強や家の仕事の手伝いをし、昼食がすむと子供たちを連れて、部落の南東側を流れている古平川の「桂の淵」と呼ばれている泳ぎ場に川遊びに行くのである。当時は、一般に「お盆中に川泳ぎをする」と河童(かっぱ)に「だっこう」を取られて死ぬ」という不吉な言い伝えがあったので、八月十三日から十五日までの間は泳がなかった。

桂の沢は、古平という地名発祥の地ともいわれている。アイヌ語で「フル・ピラ」または「フレ・ピラ」は「赤い崖」の

意(アイヌ語地名考より)だとい
うが、この桂の沢付近は四百
メートル程も赤土の崖が続いて
いて、その下に長さが百メー
トルくらいの淵があり、桂の淵と
呼ばれて格好の泳ぎ場になっ
ていたのである。

瀬を渡って、崖下にある広い
岩盤の上上がる。大きな者が
小さい子の手を引いて渡るので
あるが、中には瀬の流れに負
けて足を滑らせて転び、驚いて
水のみ込んで泣き出し、みん
なに笑われる者もいた。

岩盤の上で甲羅(こうら)干
しをししながら、大鍋をかけ、
流木や枯れ木、枯れ草を集めて
て火を焚きつける。

釣り揚げたゴダツペやドジョ
ウ、ゴッコ、たこ網ですくった
アカニ、女の子たちが手ぬぐい
ですくったゴリ、それに仕掛けた

築(やな)に入ったアユ・ヤマ
ベ・ウグイを入れた味噌汁に、
みんなが家の畑から持ち寄った
野菜なども入れた川鍋料理を作
り、とうきびを焼いては食べ、
川鍋会をして楽しんでた。

*当時、「きうりを食べて川
に入る」と河童にとられる」とい
う言い伝えがあつて、きうりは
誰も持たなかつたようである。

泳いで食ひ、食つては泳ぐ、
下手くそではあつたが、小さな
子には泳ぎを教えたりして時を
過ごし、一団は真つ赤に日焼け
して家に帰るのであつた。

その途中に、①山口金治さん
の公園『偕楽園』があつたが、
古平の人たちは、②の公園とか

陸地は難所ばかり

その後ソウヤを引き払い
ウエンベツという所まで陸
地を歩いて行つたが、ここ
からは満足な道路がなく、
浜伝えに歩くことになつた。

今日も風が強く波が岸に
打ちつけるので、山を越え
ることにした。アイヌ人が
先にたつて岩を登りはじめ
たが、わずかな岩のくぼみ
につま先を掛け、アイヌ人
に手を引かれてようやくは

アイヌの<<ことわざ
世間ばなし集>>から

古平の公園とかいって親しんで
いた所である。
ここには広い芝生の庭がある
ので、よく野球をして遊んだ。
手作りの用具でするゴムまり野
球である。

家に帰るのが遅くなって、言
い付けられた仕事ができな
い叱り飛ばされることがあつたが
まずまず楽しい思い出のある高
等科時代の夏休みであつた。

当時の古平川には、たくさん
の川魚が遡上していた。初夏の
イワナ・アカハラ・ヤマメ、夏
のアユ・ウグイ・マス、晩秋に
なるとサケなどと豊富で、釣り
人や投網打ちの人も多く入つて
いたものである。

い上がり、それから山道を
越えた。通る山道は幅が二
尺程(約六十センチ)しか
なく、右の方を見ると切り立
つた眼下に波打ちぎわ、左
の方を見ると深い谷で百丈
(三十ヤシ)余りもあり、
馬の背のような所で、一歩
でも足を踏みはずせば忽ち
絶命という、実に危険な大
難所というべき所である。

ようやく下りた所がトマ
オマナイ(苦前)という所
で、平地が少しあつた。

明治十三年一月、茅澗（茅ノ澗・泊村の旧茅沼炭鉱）の炭鉱関係者らが古平まで山越えをした。当時、炭坑頭であった外国人をふくめて総勢十数人が思いがけない苦難にあいながらも、無事に古平に到着したそのときの様子を、参加者のひとり記録として残している。

言葉を少し書き改めて全文を紹介する。

はじめに
ある時、数人が集まって虎の話をした。別にこわいともなんとも思わなかったが、中に一人だけ非常にこわがっていたが彼は実際に虎にあったことがあるのだ。体験した者でなければ本当のこわさはわからないものである。私たちは古平までの冬の山越えで、そのこわさを体験したのである。

山越えで苦難したのは一同が軽率であったことがその原因であったので、これを讀まれた人には笑われるかも知れないがこれは天候の悪かったことと、案内者がいなかったため本当の虎にあつてしまったようなものである。

昔、雪の中を旅をした人の苦勞の程が思いやられる。雪道の旅は、距離が近いからといって油断してはならない。念には念をいれ十分に準備をすることが大事である。山越えに同行した記念に記しておく。

古平行の記

明治十三年の春
根岸 迂 夫
古平行の記

古平は北海道の西海岸にある一村で後志国にあり、一方は余市町に隣り合い、一方は美国・積丹に続き、背後は山々が連なつて古宇・岩内の山に続いている。我が茅澗村から古平までは、白別・泊・盃などの村を過ぎて海岸に沿つて行くが、道路は大変険しく、距離は十八、九里もある。また岩内・余市からの街道を行けば二十里にもなる。

積丹半島は海に突き出た大きな岬で、茅澗と古平は背中合わせの位置にあるので、その背後にある山や谷を歩いて抜ければ距離も七、八里に過ぎない。村の古老たちは言うし、往來していたこともあるという。このような話を聞いたので、仲間を集めて古平まで山越えをする事になったのである。

古平場所と岡田家

十口平運上家の規定(一)

一、正月元日より三日までのご祝儀のこと

ただしその年の(漁)模様により、番屋の見回りをしながら漁の手配をしておくこと
一、雇蝦夷(アイヌの雇い人)が運上家に集まつた時の介抱(ここでは何かを与える)のこと
元日には米三盃ずつ、ほか

に練と、酢に漬けた練を少々与える。三日目くらいに濁酒(どぶろく)を一人につき一盃を与える。

一、平日(ふだんの日) 蝦夷が運上家に來た時の介抱(運上家の仕事をした時の賃金)
飯三盃、夕方からの仕事を

した時は濁酒二盃、特別に骨折り仕事をした時は、ほかに清酒一盃を与える。

一、支配人や番人を出迎えた時の慰勞(賃金)
一人につき清酒二盃、濁酒

もろみ二升を与える。
一、支配人が到着した時の酋長

や三役へのご祝儀
酋長のほか、乙名、小使に清酒一盃と濁酒一盃づつを

一、春のオムシヤは彼岸の前日
一、春のオムシヤの時
一、春のオムシヤの時

役付きの蝦夷には清酒二盃ずつ、平蝦夷には清酒一盃と濁酒一盃ずつ与える。

一、春のオムシヤの時
一人前の男蝦夷五人組には、清酒二斗入りの樽を一樽ずつ貸し与える。その空き樽を返しに來た者には、清酒一盃濁酒一盃を与える。

一、網おろし(三月十五日頃)
春の彼岸三日前に網おろしをするが、雇蝦夷一人につき清酒と濁酒それぞれ一盃半ずつを当日与える。

一、沖揚げが終わつてから、その模様によつて清酒一盃ずつ与える。

⑤「オムシヤ」はじめはアイヌの人たちと交易をする時の交歓儀礼であつたが、後には仕事が終わつたあとの慰勞の年中行事として、アイヌを支配する手段となつた。

一盃(杯)は約二、五合、米一升は濁酒二盃分に相当

遙かなる故郷の思い出

夏の夜の風物詩 《越後分盆踊り》

橘 美哉 春

子供の頃は、盆踊りが何よりの楽しみであった。だが私も友達も踊れないし、一度も踊ったこともない。とにかく盆踊りの会場で遊ぶのが楽しくて踊りは二の次だったようだ。

私の家の向かいが会場だったので、いつの間にか盆踊りの太鼓のたたき方を覚えてしまった。

夕方になり大人の踊りの人たちが集まって来ると近所の人たちが「太鼓をたたけ」という。

まだ歌い手も笛吹きも来ていない時の、いわば前座の太鼓たたきというわけで、それでも得意になって小さな体で一生懸命太鼓をたたいていた。

いよいよ歌い手と笛吹きが来て本格的な踊りになると、大人の人と交代して前座は櫓から下りる。情けない話だが、太鼓はまあたいたいても踊りはからっきし駄目だった。

笛吹きは須貝のちようちん屋さんで、笛の名人といわれている。踊りは、丸山町の裏町の川上のおばあさんが群を抜いてう

まかった。手ぬぐいの頬かぶりにまんじゅう笠をかぶり、浴衣の上に黒い帯のスタイルで、歌から笛に変わり広大寺踊りに変化するとき、腰を少し落として体をくの字に曲げながらしなやかに踊る姿は、子ども心にも「うまいなあ」と感心して見ていたものだった。

踊りが盛んになってくると踊りの輪が二重にも三重にもなることがあり、今のように時間に制限もなかったので、熱を帯びてくると踊りは明け方近くまで続くことも珍しくなかった。

盆踊りの最中に、友達数人とジンジン虫を取りに行ったことがある。缶詰の空き缶でカンテラを作り、ろうそくの明かりで虫を捕まえるのである。この虫がたくさんいるのは新地分教場の付近の草むらであった。分教場に行く道はなんとなく怖いので、新地から自動車道路に行くことにした。周りが真つ暗な中

〔今日日はこんな日〕

鴨居木水分教場が泥海の中に孤立

〔昭和5年〕

前日から降り続いた豪雨により、八月三十日になって古平川の堤防が至る所で決壊し、特に鴨居木方面では水田が水をかぶって、鴨居木分教場周辺は一面泥の海となり、浜町方面でも百二十戸以上が浸水の被害に遭った。この年は、町経済の中心であった鮭漁が漁獲皆無というところへ農作物も大打撃を受けた。水害で学用品を失った鴨居木方

面の学童には、保護者会などで学用品を贈った。川の氾濫により泥の木橋や上古平橋が流失し、古平橋も流失の危険にさらされた。この水害による被害額は七万八千円にもおよんだが、これは当時の町予算額にほぼ匹敵する額である。

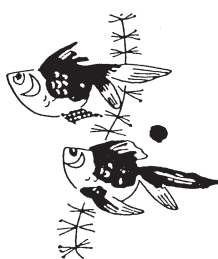
この年は皮肉にも米が全国的に豊作で、東京市場では米価が暴落する騒ぎがあった。

分教場に着いたが、その日はどうしてかジンジン虫の鳴き声が余りしなかった。

すると突然、盆踊りの歌声が聞こえてきた。張りのあるいい声だ。そういえば祖母が、「今晚は久しぶりにモッキのハルコ（茂木ハルさん）が歌うぞ」といつていたことを思い出した。

太鼓の音は聞こえるが、笛はぜんぜん聞こえない。モッキのハルさんの声だけが闇の中から聞こえてくる。ほんとうにいい声だ。マイクもスピーカーも無い時代なのに、①の干場から分教場まで届くとは、なんてすごい音量だと思った。家に帰ってからこのことを祖母にいうと、「学校まで聞こえだつてが、うんだべ、モッキのハルッコのうだッコは古平一だべなあ。娘のころはまんだまんだ大したエエ声だったもなあ。あれでも娘のころの半分ぐらいだべなあ。」

もう聞くこともできない、闇の中から聞こえてきた盆踊りの歌の強烈な思い出である。



鯉場の親方の娘

娘さんと留守番の娘

竹内コト



昭和のはじめ頃のことです。沢江に〇(ワイチ)松尾市太郎さんという鯉漁場の親方がおりました。本宅は札幌にあつて、親方は鯉漁期の頃になると古平に来て、その年の漁の始末がつくと本宅の方へ帰っていたようです。

私の家は、その親方の番屋守をしていたのです。

松尾さんのところには三人の娘さんがおりましたが、当時小学生だった私から見ると、まるで女優さんでも見ているような

熊野神社という名前 明治十年頃から、泥の木や鴨居木方面に開拓の人たちが入るようになった。昔から熊野神社の裏山は熊の多く住む場所として知られていたが、毎年、熊による農作物の被害があり、たまりかねた農家の人たちが、最初は木の根つ株をご神体にして祀り、熊の被害から免れるよう酒や供物を祈願したという。その

まぶしいものでした。娘さんたちは、みんな札幌の小学校から女学校へ上り、古平の小学校へ上がった人は誰もいませんでした。お盆休みになると古平に來ますが、番屋と廊下で続いている離れ座敷にいます。ここは立派な旅館のような座敷で、その時は、私たち家族は食事から掃除、洗濯までの世話をします。娘さんたちの話す言葉や言葉づかいもちがえば、着ている着物も立派なもので、私はそばへも寄せませんでした。

後、名前が同じ島根県の熊野神社の祭神・スサノヲノミコトを祀り、小さいお堂を建て、やがて大正の末頃に社殿を建てた。よく知られている和歌山県の熊野三社に関係あるのかと思っていたら、こちらの方は本物の『熊』の神社であつたわけで、いかにも北海道らしい。 ■天狗の面ができたので祭典行列

その後、私が小学校を卒業してから、札幌の北一条東七丁目にあつた札幌の本宅を、一度訪ねて行ったことがあります。そうしたら奥さんが、私の頭のとつぺんからつま先まで眺めてから、今度は古平のことを根掘り葉掘り聞くのです。なんか少しいやな感じでした。

和子さんも背がすらくとした、とても美人でした。〇の親方というのは小柄なとてもよい人でした。松尾さんでは鯉漁が駄目になつてからは、札幌で石炭・石油の販売業をしていました。だいぶ後になってから、数の子を土産に松尾さんを訪ねて行ったことがありましたが、「よく来てくれた」と、大変喜んでくれましたが、ずいぶんと老いていたのを見て、歳月を感じさせられました。

熊野神社

戦後、沢江町の前田さんという人が(はつきりしない)天狗の面を彫つて奉納した。これを機会に鴨居木から廻り淵まで祭典行列をしたが、行列はこのとき一回だけであつた。

戦後、沢江町の前田さん 出て賑いだつたという。 ■人の話一点をつなぐ 鴨居木の工藤勝美さんとの話の中であつたことを、水見さん、田口甫さんにもお聞きした。人から人へと話をつなげていくと、それこそ話はずんでくる。 古平高校の生徒も、郷土の民俗文化としてのお祭りに関心をもって、若い意欲を燃やしている。

